

## オムツ触りがある意思疎通困難な患者への身体拘束介助に向けた取り組み

公立羽咋病院

岡崎 利咲

本研究は、脳梗塞後遺症で高次機能障害があり、オムツ触りによる感染予防のための抑制衣着用に対して、毎日多職種でカンファレンスを行い、身体拘束解除に向けて取り組んだ事例であり、効果的であった要因を分析したものである。A氏は経口での栄養確保が困難で、胃瘻から栄養を注入している。まず、排便コントロールを行い、下剤を調整し、2日に1回決まった時間に排便がみられ、排泄のタイミングを見逃さずに交換し、不快感を軽減出来た。また、妻の情報で機械いじりが好きなことから、同じ握る動作である柔らかいボール握りを促し、左手で握ったり離したりと、オムツよりもボールに意識が向くようになった。また、好きな演歌も聞くことで、穏やかな表情がみられた。

多職種カンファレンスで効果的であったケアをタイムリーにフィードバックし、多職種全体がA氏に関心を寄せ主体的に身体拘束解除に取り組めたことが抑制解除出来た大きな要因であったと分析する。